

## 第一章…湯けむりと黄金色の溜息

「……ねえ、本当にいいの？　ここ、門構えからして桁が違う気がするんだけど」

石畳の長いアプローチを歩きながら、隣を歩く彼女——シャロが、不安げに僕の袖をちょんちょんと引っ張った。

山間の静寂に包まれた、隠れ家のような高級旅館。創業百年を超える老舗の風格は、確かに一見さんや学生カップルを拒むような威厳がある。

けれど、今日は特別だ。ずっと前から計画し、少しずつ貯めた資金をこの一泊に注ぎ込んでいる。

シャロはトレッドマークのうさ耳カチューシャを外し、ふわふわと波打つ金髪を風に遊ばせている。私服は清楚な白いブラウスに、膝丈のフレアスカート。どこかの名家のお嬢様と言われても誰も疑わない気品があるけれど、その瞳は「宿泊費」という目に見えないモンスターに怯えて揺れていた。



「一泊のお金で、特売のもやしが何年分買えるのかしら……ううん、考えちゃだめ。せっかく連れてきてもらったんだもの」

ぶつぶつと呟きながら、自分自身に言い聞かせている姿がいじらしい。

大丈夫だよ、と僕が微笑むと、シヤロは頬を少しだけ赤らめて、ふいっと視線を逸らした。

「べ、別に心配なんてしてないわよ。ただ、あまりに豪華すぎて……心臓に悪いというか」

強がりを言いながらも、繋いだ手は離さない。むしろ、緊張しているのか少し強く握り返してくる。その指先が少し冷たいのが愛おしくて、僕は彼女の手をコートのポケットに入れた。

「あっ……」

ポケットの中で指を絡めると、シヤロは小さく声を漏らし、それから安心したように吐

息をつく。

うさ耳がないと、彼女の華奢な輪郭や、首筋の白さが際立って見える。守ってあげたくなる傳さと、芯の強さ。そして、アンバランスなほどに豊かな肢体。

今日は、そのすべてを独り占めできるのだ。

「お部屋はこちらでございます」

仲居さんに案内されたのは、離れにある露天風呂付きの特別室だった。

重厚な木の扉が開かれると、新しい畳の香りと、微かなお香の匂いが鼻をくすぐる。広縁の向こうには手入れされた日本庭園が広がり、その奥には湯気を立てる客室露天風呂が見えた。

仲居さんが去り、重い引き戸が閉まった瞬間、室内の空気が変わる。

二人きり。その事実が、急激に意識され始めた。

「す、す……」



シヤロは部屋の中央で立ち尽くし、高い天井や、床の間に飾られた掛け軸を、目を丸くして見回している。

「これ、本当に泊まってるの？ あとで追加料金とか請求されたりしない？ お茶菓子も、これ……桐の箱に入ってるじゃない！」

テーブルの上に置かれたウエルカムスイーツに駆け寄り、恐る恐る蓋を開けるシヤロ。中には繊細な細工が施された和三盆と、季節の生菓子が入っていた。

「美味しそう……でも、これ一つで私の三日分の食費になりそう」

「食べないの？」

「た、食べるわよ！ 残すなんてもったいない！」



僕がからかうように言うと、シャロは即座に反応して、生菓子を一つ手に取った。小さく齧る。その瞬間、金色の瞳がキラキラと輝いた。

「んっ……！！ 美味しい……！！ すごく上品な甘さ……！！」

幸せそうに頬を緩める顔を見て、連れてきてよかったと心から思う。

彼女は普段、本当に頑張りすぎている。学費免除の特待生であり続けるための勉強、生活費を稼ぐための数々のアルバイト。フルール・ド・ラパンでの華やかな給仕姿の裏には、つましい努力の積み重ねがあるのだ。

今日くらいは、お姫様扱いさせてほしい。

僕はお茶を淹れ、彼女の隣に座った。

カフェインに弱いシャロのために、あらかじめリクエストしておいたノンカフェインの黒豆茶だ。

「はい、お茶」



「ありがとう。……気を使わせちゃったわね」

湯呑みを受け取る時、指先が触れ合う。

シヤロは香ばしい香りを楽しみながら一口すすり、ふう、と肩の力を抜いた。

「……落ち着く。こんなに静かな場所、久しぶりかも」

隣にある貧乏長屋の騒音も、バイト先の喧騒もない。  
僕の肩に、こっんと彼女の頭が乗せられた。

「……ねえ」

「ん？」

「……嬉しい。ありがとう」



消え入りそうな声だったけれど、その言葉は真っ直ぐに胸に届いた。

素直なシャロは、カフェインで酔った時か、こうして二人きりで甘えている時しか見られない貴重な姿だ。

金色の髪からは、いつものハーブティーの香りではなく、シャンプーの優しい香りがあった。

「さて、と。……まずは温泉の前に、浴衣に着替えないとね」

一息ついたところで、シャロが立ち上がった。

旅館の浴衣はサイズ別に用意されている。彼女は自分に合うものを選ぶと、「着替えてくるから、あっち向いてて」と言い置いて洗面所へ……行こうとして、足を止めた。

「……やっぱり、ここで着替える」

背中を向けたまま、ぼつりと呟く。



耳まで真っ赤になっているのが見て取れた。

「……いいの？」

「い、いいも悪いもないわよ。どうせ、その……あとで一緒に入るんだし……」

語尾がごによごによと小さくなっていく。

彼女なりの精一杯の誘惑、あるいは覚悟なのかもしれない。

僕は黙って頷き、それでも気恥ずかしさから少しだけ視線を窓の外に向けた。

衣擦れの音が聞こえる。

スカートのファスナーが下りる音。ブラウスが脱ぎ捨てられる音。

心配だけで、心臓の鼓動が早くなる。

「……もう、見てもいいけど」



しばらくして、控えめな声が聞こえた。  
振り返った瞬間、息を呑んだ。

淡い紺色に、白い兎の柄があしらわれた浴衣。旅館の粋を計らいか、彼女にあまりにも似合っている。

だが、何よりも目を奪われるのは、そのシルエットだ。

普段の制服も胸を強調するデザインだが、浴衣はまた違った色香がある。

帯でキュッと締められた細いウエストが、逆にその上の豊満さを際立たせているのだ。襟元が少しはだけて、白い鎖骨と、豊かな谷間の気配が覗いている。

極貧生活で栄養が足りていないはずなのに、どうしてここだけはこんなに発育が良いのだろう。華奢な手足とのギャップが、背徳的なまでの魅力を放っている。

「ど、どう？ 変じゃない？」

シヤロが袖を広げて、少し不安そうに小首を傾げた。

ウェーブのかかった金髪を、今はうなじが見えるように片側に寄せている。その無防備

なうなじの白さが、眩しい。

「すごく似合ってる。可愛いよ」

「……ふん、当たり前でしょ。素材がいいんだから」

いつもの強気な台詞を返してくるが、口元は嬉しそうに緩んでいる。

彼女はトコトコと僕の目の前まで歩いてくると、そのまま膝の間に割り込むようにして座り込んできた。

畳の上に乗ったんと座り、僕の太ももに背中を預ける体勢。

「……あのね」

シャロが僕の手を取り、自分の帯の上、お腹のあたりに導く。

浴衣越しの体温が、掌に伝わってくる。



「まだ、お風呂沸いてないみたい。お湯が溜まるまで、こうしてて」

それは、言葉以上の意味を持っていた。

僕は彼女の背中から腕を回し、その柔らかな体を抱きしめる。

華奢な肩。細い腰。そして腕に当たる、豊かな胸の感触。

シヤロの体がびくりと震えた。

「ん……」

耳元で、甘い吐息が漏れる。

抱きしめると、彼女は抵抗するどころか、もっと深く僕に体重を預けてきた。頭を後ろに反らし、僕の肩に頬を擦り付ける。

至近距离で見上げる瞳は、潤んでとろんとしていた。

「……ここに来る電車の中でね、ずっと考えてたの」



「なにを？」

「今日は、その……あのご主人様の喫茶店じゃなくて、ただのシャロとして……いっぱい甘やかしてもらおう、って」

上目遣いの破壊力は凄まじい。

バイト先の制服姿も可愛いが、このプライベートな浴衣姿、そして「ただのシャロ」という言葉が、理性を揺さぶる。

「もう十分甘えてるように見えるけど？」

「まだよ。全然足りない」

シャロは拗ねたように唇を尖らせると、僕の首に腕を回して、ぐっと顔を近づけてきた。金髪が僕の頬をくすぐる。甘い香りが濃くなる。



「……お風呂、まだかな」

彼女の視線が、僕の唇に落ちる。

それは温泉への催促ではなく、もっと別の行為への誘いだった。

「確認してこようか？」

「だめ。……離れないで」

言うが早いか、シャロは自分から唇を重ねてきた。

触れるだけの、バードキス。

柔らかくて、温かい。

離れ際に、ちゅ、と水っぽい音が静かな部屋に響く。

シャロは顔を真っ赤にして、でも逃げることなく、熱っぽい瞳で僕を見つめ続けている。



「……続き、したい？」

挑発するような、でも拒絶されたら泣き出しそうな、震える声。

その問いに答える代わりに、僕は彼女の帯に手をかけ、もう一度強く抱き寄せた。

浴衣の襟がさらに乱れ、白い肌が露わになる。

露天風呂から聞こえるお湯の流れる音が、これから始まる熱い夜の合図のように聞こえた。

### 第10章…月明かりと湯船の誘惑

客室露天風呂へと続くガラス戸を開けると、冷たく澄んだ夜気が火照った肌を撫てた。

湯船からは白い湯気が立ち上り、夜空に溶けていく。岩造りの露天風呂は二人で入るには十分すぎる広さがあり、庭園の木々が月明かりに照らされて幻想的な影を落としていた。

ちやぶん、と先にお湯を掬い、肩にかける。

絶妙な湯加減だ。これなら長く入っていられそうだし、何より——この後の「行為」に

も、丁度いい。

「……お待たせ」

背後から、鈴を転がすような、けれど少し湿り気を帯びた声が聞こえた。

振り返ると、脱衣所で浴衣を脱ぎ捨て、バスタオル一枚を身に纏ったシャロが立っていた。

湯気越しに見るその姿は、この世のものとは思えないほど艶めかしい。

普段の活動的な雰囲気は鳴りを潜め、今はただ、愛されることを待つ一人の雌の顔をしている。

「……なに、そんなに見つめて」

「綺麗だから」

「ふふ……正直でよろしい」



シャロは悪戯っぽく微笑むと、湯船の縁まで歩み寄ってきた。

そして、僕の視線を一身に浴びながら、ゆっくりと、わざと焦らすようにバスタオルの結び目に手をかける。

「ねえ……覚えてる？」

「え？」

「昔……もつと小さかった頃のこと。私、自分の体があんまり好きじゃなかったの。栄養も足りてなかったし、周りの子と比べて、なんか貧相だなんて」

するり、と布が落ちる。

雪のような白肌が、月光の下に露わになった。

極貧生活を送っているとは思えないほど、その肌はきめ細かく、透き通るようだ。だが、視線はどうしても一点に吸い寄せられる。



細い腰くびれの上で、重力に逆らうように誇らしげに突った、二つの果実。

「でもね、今は……結構、気に入ってるのよ？」

シヤロは片手を腰に当て、もう片方の手で、下から自身の豊かな膨らみをくいっと持ち上げた。

むにゆり、と柔らかい肉が形を変え、指の隙間から溢れそうになる。

先端の愛らしい突起が、寒さと興奮でつんと尖っているのが見えた。

「見て。……こんなに大きくなったの。制服のボタン、たまに弾け飛びそうになるくらい」

「すごいな……本当に」

「ふふっ、すごいでしょ？ 栄養なんて全然足りてないはずなのにね……不思議。見てもらうために、頑張って育ってくれたのかも」



彼女は恥じらうどころか、挑発するように胸を反らし、その圧倒的なポリウムを見せてつけてくる。

「君のものだよ」と言わんばかりのポーズ。

その自信に満ちた表情と、揺れる果実のアンバランスさが、僕の理性を激しく揺さぶった。

「……………んっ、寒い……………早く温めて」

シャロがつま先をお湯に入れる。

波紋が広がり、彼女はゆっくりと、僕のいる場所へと沈んできた。

ざぶり。

お湯が溢れ出る音と共に、圧倒的な質量と熱量が、僕の体に押し付けられる。彼女は対面ではなく、僕の背後から抱きつくようにして湯船に入ってきたのだ。

「はあ……………っ、あったかい……………」



耳元で漏れる、甘い吐息。

背中に感じる、二つの柔らかない圧迫感。

シャロの腕が僕の首に回り、濡れた肌同士が密着する。お湯の中だというのに、彼女の肌は驚くほど熱く、そして滑らかだ。

「……ねえ、背中流してあげる……なんて、言わないわよ」

「じゃあ、どうするの？」

「こうして……その体温、全部奪ってあげる」

シャロは僕の耳朶を甘噛みしながら、背中の感触を確かめるように体を擦り付けてくる。ぬるり、つるり。

お湯の浮力と滑りやすさも相まって、彼女の胸が僕の背中で変幻自在に形を変え、その弾力を伝えてくる。



その刺激はあまりにも強烈で、僕は思わず低い声を漏らした。

「っ……シヤロ」

「ん……なあに？ ……あ、すご。背中越しても分かる。ドキドキしてる」

くすくすと笑う彼女の息が、濡れたうなじにかかる。

その吐息だけで、酔ってしまいそうだ。

「こっち向いて」

嘔きと共に肩を引かれ、僕は湯の中で反転して彼女と向き合った。

月明かりに照らされたシヤロの顔は、湯あたりしたように赤く、瞳は潤んでとろんとしている。

金色の髪がお湯に濡れて肌に張り付き、まるで水の精霊のようだ。



「……触って」

彼女は僕の手を取り、自分の胸へと導いた。  
掌に収まりきらないほどの重量感。

指を沈めると、雪見だいふくのように指が埋もれていく。

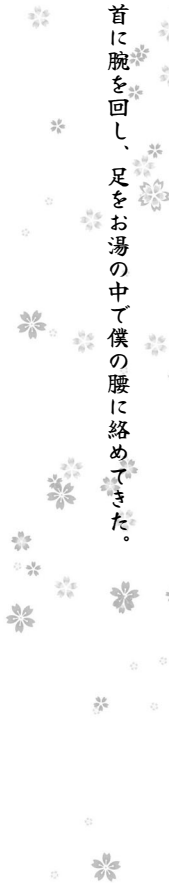
「はあっ……んっ……！」

指先で先端を軽く弾くと、シャロはビクッと背中を反らし、艶っぽい声をあげた。  
水面が揺れ、チャブチャブと音を立てる。

「……いいの？　こんなところで」

「いいの……ここには、私と……二人しかいないんだもの。……誰にも遠慮なんてしない」

彼女は僕の首に腕を回し、足をお湯の中で僕の腰に絡めてきた。



密着度はさらに高まる。

お腹の下あたりに、柔らかくて温かい秘所が押し当てられる感触があった。

「……………んっ、はぁ……………。手……………大きくて……………熱い」

僕が胸を揉みしだくりズムに合わせて、シャロの口から切なげな吐息が漏れる。

彼女は自分のコンプレックスだった貧しさを乗り越え、今はこうして、女としての武器を最大限に使って僕を誘惑している。

その健気さと、溢れ出る色気がたまらなく愛おしい。

「もっど……………もっど寝めて。この胸も、体も……………全部、好きなようにしていいから」

シャロは濡れた瞳で僕を見上げ、懇願するように唇を寄せてきた。

触れ合った唇は、お湯の熱さ以上に熱を帯びていた。

舌が絡み合い、唾液の音が水音に混じる。



「んむっ……ちゅ……はあ、んっ……」

長い口づけの後、銀色の糸を引きながら唇が離れる。  
シヤロは荒い呼吸を繰り返しながら、僕の胸に顔を埋めた。

「……もう、お風呂のせいかな、それとも……分かんない。頭がくらくらする」

「のぼせた？」

「ううん……とろけそう。……ねえ」

彼女は上目遣いで、とろりとした視線を送ってくる。

その表情は、もう限界まで高まった情欲を隠そうともしていなかった。

「……ここじゃ、続き……できないでしょ？」



誘うような、それでいて命令するような口調。

彼女の手が、水中を伝って僕の浴衣（というか、今はもう腰に巻いているだけのタオル）の下へと忍び寄ってくる。

「ふふ……おつきくなってる。……変態」

嬉しそうに嘯くと、シャロは僕の手を引いて立ち上がった。

ざばあつ、と盛大にお湯が跳ねる。

月光に晒された全身は、火照って桜色に染まり、水滴を弾いて輝いていた。

「部屋に戻りましょ。……ベッドの上で、もっといっぱい、確かめて？」

その言葉は、今夜はもう眠らせないという、甘く危険な宣告だった。

第〇章…甘い空息と柔らかな果実



濡れた体を手早く拭き、部屋に戻る頃には、二人の鼓動は既に早鐘を打っていた。布団の上に押し倒されると、シャロは抵抗することなく、むしろ待ちわびていたように腕を広げて僕を受け入れた。

「ん……っ、もう、待ちきれないって顔してる……」

上気した頬を撫てながら、シャロが熱っぽい瞳で囁く。

湯上がりの肌は桜色に染まり、甘い香りがさらに濃厚に漂っている。金色の髪が枕に散らばり、白いシーツとのコントラストが目には焼き付くほど鮮烈だ。

浴衣は乱れ、帯は解けかけている。そこから覗く白い谷間が、荒い呼吸に合わせて上下していた。

「……キス、して」

ねだるような声と共に、彼女の細い指が僕の髪に絡む。

唇を重ねると、シャロは「んんっ……！」と甘い声を漏らし、貪るように舌を絡めてきた。

お風呂でのキスよりも、さらに深く、濃厚に。  
唾液が混じり合う水音と、鼻にかかった吐息が部屋に響く。

「はあ……んむ、ちゅ……っ、……ぶはっ」

一度唇を離すと、銀色の糸が引いた。

シヤロはとろんとした瞳で、酸素を求めるように口元を緩めている。

「……すごい。キス……頭、真っ白になる……」

「シヤロ、可愛いよ」

「……ん、もつと言って……もつと、おかしくして……」

彼女は自ら浴衣の襟を大きく広げ、その豊かな双丘を露わにした。

月明かりを受けて白く輝く肌。その頂には、興奮で赤く染まった愛らしい蕾が、ツンと

自己主張している。

僕は吸い寄せられるように、その柔らかい膨らみに顔を埋めた。

「あっ……！！ ひゃうっ……！！」

直接肌に唇を這わせると、シヤロはビクンと背中を反らした。

豊満な肉感。顔全体が包み込まれるような、圧倒的な質量と柔らかさ。頬を擦り付けると、むにゅりと変形し、甘い弾力が返ってくる。

「んっ、はあ……っ、そこ……だめ、そんなに擦り付けたら……っ！」

嫌がっている言葉とは裏腹に、彼女の手は僕の頭を抱きしめ、さらに胸へと押し付けてくる。

まるで、僕の存在をその胸で確かめようとしているかのように。

舌先で、尖った蕾を転がすように愛撫する。



「ひっ………！ あ………んんんっ！」

声のトーンが一段高くなる。

シヤロはつま先を丸め、シーツをギュッと握りしめた。

「あ、あぁっ………！ すごい、きもちい………っ、頭の奥、痺れる………っ」

右を愛でれば、左の胸が寂しそうに揺れる。

僕は手を伸ばし、もう片方の膨らみを掌で包み込んだ。

指が沈み込む。溢れるほどのポリウムを揉みしだくと、シヤロの喉から嬌声が漏れた。

「ふぁぁっ………！ おっきい手………っ、胸、全部包まれちゃってる………う」

コンプレックスだった貧しさなど、微塵も感じさせない。

今の彼女は、愛される喜びに満ちた、最高に魅力的な女性だ。

「……ねえ、見て。私の胸……触られて、こんなになってる……」

僕が顔を上げると、シヤロは恥じらいと快楽が入り混じった表情で、自分の胸を見下ろしていた。

僕の唾液で濡れて光る蕾。指の跡が赤く残る白い肌。その淫靡な光景に、彼女自身も興奮しているようだ。

「変、かな？ ……はしたない、かな？」

「いや、最高にそそるよ」

「……っ、ばか。……嬉しいくせに」

シヤロは潤んだ瞳で睨むような仕草を見せるが、その頬は緩みつばなしだ。彼女は僕の手を取り、再び胸へと導く。



今度は、もっと激しく、もっと深く。

「……ねえ、焦らさないで。……中まで、溶かしちゃって？」

耳元で囁かれたその言葉は、理性の最後の一本を焼き切るには十分すぎた。  
甘い吐息と、柔らかな果実の感触。  
夜はまだ、始まったばかりだ。

#### 第4章…蜜の味と母性の目覚め

「んっ、あ……っ！　そこ、舌……だめえ……っ！」

部屋の明かりを落とし、行灯の柔らかな光だけが照らすベッドの上。  
シヤコの悲鳴にも似た甘い嬌声が、絶え間なく響いていた。

僕は彼女の豊かな双丘の谷間に顔を埋め、敏感になりきった蕾を舌先で執拗に転がして

いる。

先ほどの指での愛撫で十分に充血し、硬く尖った突起は、ほんの少し触れるだけでも電流が走るほどの感度になっているようだ。

「ひぁ……っ！ ざらざらするう……っ！ あ、熱い……っ」

シャロの背中が弓なりに反り、シーツを握る手が震える。

普段は強気で、生活力に溢れた彼女が、今はただ快楽の波に翻弄される無力な少女になっている。そのギャップが、嗜虐心をさらに煽る。

「そんなに感じる？」

「あ、当たり前……でしょ……っ。だって、直接……舌で、そんな……っ」

涙目で抗議しながらも、彼女の手は僕の頭を抱き寄せ、決して離そうとはしない。白い肌は汗ばみ、甘い香りがさらに濃厚になって鼻孔をくすぐる。

僕は片方の胸を両手で包み込んで固定し、その頂を口の中に含んだ。

「んんーっ！！」

ちゅぶ、じゅる、と湿った音が静寂を破る。

最初は優しく、次第に吸引力を強めていく。

「はあ、ああっ……！ す、吸われてる……っ、強い、よお……っ」

口の中いっぱい広がる、圧倒的な柔らかさと弾力。

まるで高級なマシユマロか、それ以上に蕩けるような感触。

貧乏生活で培われた細い体のどこに、これほどの脂肪と母性が蓄えられていたのか。

「……ねえ、そんなに吸ったら……変になっちゃう……っ」

「変について？」



「なんか……体の中身、全部吸い出されちゃいそうて……っ、怖いのに……きもちいの……っ」

シヤロは虚ろな瞳で天井を見上げ、バクバクと口を開閉させて酸素を求めている。僕は一度口を離し、唾液で濡れて光る先端に息を吹きかけた。

「ひゃうっ!？」

「敏感だね」

「い、意地悪……っ。……ねえ、もつと……」

シヤロは僕の頬に手を添え、潤んだ瞳で見つめてきた。

「……赤ちゃんみたいに、もつと強く吸って? ……私ので、お腹いっぱいになつて……」



それは、理性が焼き切れた彼女からの、思いがけない誘いだっただ。

「授乳」——もちろん、実際に出るわけではない。けれど、その行為が持つ背徳感と奉仕の喜びが、彼女の本能を目覚めさせているのかもしれない。

僕は望み通り、もう一度その豊かな果実に吸い付いた。

今度は遠慮なく、頬が扱けるほど強く。

「あぁっ！ んぐう……っ！ すごい、吸引力……っ！」

ちゅ、ちゅぶ、じゅるるる……。

卑猥な水音が部屋中に響き渡る。

シヤロは僕の頭を胸に押し付け、母が子を慈しむように、優しく髪を撫で始めた。

「よしよし………いっばい飲んで……ふふっ、私のここ、美味しい……？」



快樂に歪む顔と、慈愛に満ちた微笑み。相反する表情が同居している。カフエインで酔った時とは違う、もつと深く、本能的な陶酔。

「あ……っ、だめ、なんか……本当に出ちやいそう……っ。脳みそ、とろとろして……っ」  
「んっ……、んぶ……」

「ああっ、んああ……っ！ 先っば、噛んじやだめえ……っ！ 痺れちやう……っ！」

吸いながら舌先で弾き、時折甘噛みをする。

そのたびにシヤロの体はビクンビクンと痙攣し、太ももがシーツを擦る音が聞こえる。彼女の下半身も、もう限界に近いほど濡れているはずだ。

「はあ……はあ……っ、もう、許して……っ、胸だけで、イッチャう……っ」

シヤロの呼吸が過呼吸気味になり、爪が僕の背中に食い込む。



「……ご飯じゃないのに……っ、でも、栄養になれるなら……全部、あげたい……っ」

健気で、淫らかな献身。

その言葉に興奮のスイッチが入り、僕は反対側の胸も同じように愛撫し、両方の蕾を十分に勃起させ、唾液でベタベタに濡らした。

顔を上げると、そこには恍惚の表情を浮かべたシヤロがいた。

胸元は涎と汗で濡れそぼり、白い肌に赤いキスマークが点々と散らばっている。それは、まごうことなき「僕のもの」であるという刻印だ。

「……満足、した？」

荒い息の下から、掠れた声で問いかけてくる。

「まだまだだよ。……これからが本番でしょ？」



「……ふふつ、そうね。……こんなに敏感にさせといて、終わりなんて……許さないんだから」

シヤロはゆつくりと足を開いた。

そこには、もう愛液でぐっしょりと濡れた秘所が、待ちきれない様子で露わになっていた。

胸への愛撫だけで、ここまで感じていたのだ。

「……来て。私の中の、一番深いところまで……」

彼女の両腕が僕の首に絡みつく。

甘く、重く、逃れられない蜘蛛の糸のように。

僕たちは互いの熱を求め合い、最後の境界線を越える準備を整えた。

第の章…とろける黄金と愛の刻印



「……んっ、はぁ……もう、限界……」

シヤロの潤んだ瞳が、切願するように揺れている。

愛液で濡れそぼった秘所は、既に僕を受け入れる準備を完全に整え、ヒクヒクと小さく収縮しては、甘い蜜を溢れさせていた。

僕は彼女の太ももを割り、その間にある聖域へと身を沈める。

「……入るよ」

「ん……来て。……私の中を……いっばいに満たして……」

ゆっくりと、先端を宛てがう。

熱く、湿った肉壁が、待ちわびていた獲物を捕らえるように吸い付いてくる。腰を沈めると、ヌプッ、という水音と共に、二人の境界線が消失していった。



「あ……っ、ああ……っ！ 入っ、てくる……っ！ おつきい……っ」

シヤロが背中を大きく反らし、苦しげで、それでいて甘美な声を上げる。窮屈なほどの締め付け。全身が熱い粘膜に包み込まれる極上の感覚。根元まで飲み込まれた瞬間、僕たちは互いに深い溜息を漏らした。

「はあ……っ、すごい。……奥まで、繋がってる……」

「シヤロ……」

「んっ……動いて。……もっど……好きなように、かき回して……っ」

彼女の言葉を合図に、僕は腰を動かし始めた。

最初はゆっくと、互いの感触を確かめるように。

引き抜いては、再び深く突き入れる。そのたびに、内壁がひだのように絡みつき、離れがたいと訴えてくるようだ。



「んあっ！ あ、っ……！ そこっ、深いっ……！」

最奥を小突かれるたび、シャロの華奢な体がビクンと跳ねる。

金色の髪がシーツの上で乱れ、白い肌が汗で艶やかに光る。

胸の豊かな膨らみも、激しい動きに合わせてたぶんたぶんと揺れ、視覚的にも興奮を煽り立ててくる。

「……っ、いい。シャロの中、すごくいい……」

「ああっ、私も……っ！ 擦れて、気持ちいいの……っ！ もっと、もっと激しくして……っ！」

愛おしさが爆発し、僕は彼女に覆いかぶさるようにして唇を塞いだ。

舌を絡め合いながら、腰の動きを加速させる。

「んんっ……！！ ふぁ……っ、んむっ……！！」



口づけて声は塞がれるが、鼻にかかった甘い喘ぎが、鼓膜を直接震わせる。  
唾液の味と、交じり合う体液の匂い。

五感のすべてがシャロで満たされていく。

パン、パン、と肉と肉がぶつかり合う音が、部屋に響き渡る。

快樂の波は次第に高くなり、もはや理性を保つことなど不可能だった。

「はあっ、はあっ……！　だめっ、もう、おかしくなるう……っ！　好きっ、大好き……っ！」

シャロが僕の背中に爪を立て、しがみついてくる。

涙で濡れた瞳で見上げられ、愛の言葉を囁かれる。それ以上の媚薬など存在するだろうか。

「僕もだよ。……愛してる」



「ああっ……っ！ 嬉しいっ……っ！ ねえ、もつと奥……一番深いところに、しるし、ちょうだい……っ！」

その懇願が、最後の引き金となった。

僕は彼女の足を自分の腰に強く絡めさせ、渾身のかた最奥へと打ち込んだ。

「あっ、いくっ！ ……壊れちゃうっ、イッちゃううううっ！」

「出すよ……っ、シャロッ！」

絶頂の瞬間、視界が白く弾けた。

僕は彼女の胎内の一番深い場所で、熱い飛沫を何度も、何度も吐き出した。

ドクドクと脈打つ自身の分身を通して、生命の熱が彼女の中に注ぎ込まれていくのを感じる。

「んあああっ……っ！ あ、熱いっ……っ！ 中、いっぱい……っ、来てるうう……っ！」



シヤロの膺内が激しく痙攣し、僕のを締め上げながら、彼女自身もまた強烈なオーガズムに達していた。

二人の絶頂が重なり合い、溶け合い、意識が遠のいていく。

しばらくの間、僕たちは荒い呼吸を繰り返しながら、繋がったまま抱き合っていた。体力のすべてを使い果たしたかのような脱力感と、それを上回る圧倒的な幸福感。

「……はあ、はあ……。すごかった……」

シヤロが僕の胸に顔を埋め、消え入りそうな声で呟く。

その体はまだ小刻みに震えており、余韻の深さを物語っていた。

「大丈夫？ 苦しくない？」

「ううん……。幸せすぎて、溶けちゃいそう……」



彼女はとろんとした瞳で僕を見上げ、愛おしそうに頬を撫でてくれた。

「……いっばい、出してくれたね」

「ごめん、止められなくて」

「謝らないで。……嬉しいの。私のお腹の中……いっばいになってるのが……分かるから」

シヤロは自分のお腹をさすりながら、聖母のような優しい笑みを浮かべた。

そこには、貧乏生活に追われる苦労人の少女の面影はなく、ただ愛する人に満たされた一人の女性の姿があった。

「……好き。世界で一番、愛してる」

「僕もだよ。……一生、離さないから」



再び唇を重ねる。

今度は激しいものではなく、互いの体温と愛情を確認し合うような、優しく長いキス。窓の外からは虫の声が聞こえ、月明かりが二人の裸体を静かに照らしていた。

「……ねえ、もう一回」

「え？」

「まだ、足りない……。朝まで、離さないでね？」

シヤロが悪戯っぽく、そして妖艶に微笑む。

その誘いに、僕の体は再び熱を帯び始めていた。

黄金色の髪に包まれたこの夜は、まだまだ明けそうにない。

温泉旅館の豪勢な一夜は、こうして二人の愛の記憶として、深く、甘く、刻まれていっ

たのだった。

エピローグ…朝陽と残り香

障子の隙間から差し込む鋭い朝陽が、まぶたを白く焦がした。

小鳥のさえずりと、遠くから聞こえる鹿威しの音。

けれど、僕の意識を現実へと引き戻したのは、そんな風流な環境音ではなく——腕の中に感じる、確かな重みと温もりだった。

「ん……う……、すー……、すー……」

すぐ隣で、規則正しい寝息が聞こえる。

目を開けると、そこには無防備極まりない姿で眠るシヤロがいた。

金色の髪は雀の巣のように乱れ、枕元に散らばっている。掛け布団は腰のあたりまで蹴飛ばされておろ、昨晚、僕があればど愛で尽くした柔らかな肢体が、朝の光に晒されていた。



雪のような肌のあちこちに、赤い花卉のような愛の痕跡——キスマークが咲いている。首筋、鎖骨、そして豊かな胸の膨らみにまで。

それを見た瞬間、昨夜の記憶が鮮烈に蘇り、下腹部がじんわりと熱くなった。

「朝まで離さない」という言葉通り、僕たちは本当に何度も求め合い、意識が飛ぶように眠りに落ちたのだ。

「……………んんっ……………」

僕が頬にかかった髪を指で払うと、シヤロが眉をひそめ、身じろぎをした。

「……………んあ……………、重い……………、あ、れ……………？」

ゆっくりと、金色の瞳が開かれる。

寝ぼけ眼で周囲を見回し、最後に僕の顔を見て——数秒後、ポッ！と音がしそうなほど顔を真っ赤にした。



「ひゃうっ!? お、おはよう……っ！」

慌てて布団を引き上げようとするが、体中が痛むのか「あうっ……」と小さな悲鳴を上げて動きを止める。

「だ、大丈夫？」

「だ、大丈夫なわけ……ないでしょ……っ。腰、碎けそうだし……股関節、ガクガクするし……」

シヤロは潤んだ瞳で僕を睨みつけるが、その表情に怒りはなく、むしろ甘えたような色が濃い。

「……あんなに、激しくするんだもん。……私、壊れちゃったかと思った」

「ごめん。可愛すぎて、止まらなくて」



「……っ、すぐそうやって……。ずるい」

彼女は口を尖らせながらも、布団の中で僕の体に擦り寄ってきた。

素肌と素肌が触れ合う感触。

シーツの下は、昨晚の愛液と僕が出したもので、まだ少し湿り気を帯びている。その生々しい感覚が、背徳的でたまらない。

「……ねえ、見て」

シャツが布団を少しだけ下げ、自分の胸を見せてきた。

豊かな双丘は、まだ僕の手の感触を覚えているかのように熱を持ち、先端の蕾はピンと立っている。その周りには、僕が付けた吸血の痕がいくつも残っていた。

「こんなに跡つけて……。バイトの制服、胸元開いてるのに……。どうしてくれるのよ」



「絆創膏、貼る？」

「ばか。……コンシーラーで隠すわよ。……でも」

彼女は僕の手を取り、再びその柔らかい場所に押し当てた。  
ドクン、ドクンと、心臓の音が掌に伝わってくる。

「……消えるまでは、これ見るたびに……思い出しちゃうじゃない。……昨日のこと、全部」

上目遣いで囁かれる言葉に、理性の糸がまた切れそうになる。

朝特有の気だるさと、男性機能の自然な高まり。

僕の手が、吸い寄せられるように胸を揉みしだくと、シヤロは「んあっ……！」と甘い声を漏らした。

「はあ……っ、また、おつきくなってる……。さつき起きたばっかりなのに……」



「シヤロが誘うから」

「ち、違うもん……っ。……でも、いいよ」

彼女は恥じらいながらも、ゆっくりと足を開いた。

朝の光に照らされた秘所は、昨晚の行為で充血し、まだ少し開き気味になっている。そこから、とろりとした愛液が溢れてきた。

「……チェックアウトまで、まだ時間……あるでしょ？」

シヤロが僕の首に腕を回し、耳元で熱い吐息を吹きかける。

「……お風呂で綺麗にする前に、もう一回……ドロドロに、して？」

「……追加料金、請求するよ？」



「ふふっ……体で払ってあげる」

僕たちは再び、朝のベッドという白い海に沈んでいった。  
小鳥のさえずりをかき消すほどの、甘い喘ぎ声と、愛を囁く言葉。

「……はあ、いいお湯だった。……じゃなくて！」

旅館の玄関を出たところで、シャロが大きく伸びをした。

整った髪と、きちんとした私服。いつもの清楚な少女に戻っているが、その肌艶は以前よりも明らかに良くなっている。

「本当に、夢みたいな時間だったわ。……明日からの生活に戻るのが怖い」

「また来ようね」



「……ええ。絶対に」

シヤロはふと足を止め、僕の方を振り返った。

そして、誰にも見えないような早さで、ちゅ、と僕の頬にキスをした。

「……ありがとう。大好きよ」

風に揺れる金髪と、うさ耳のない頭。

その笑顔は、どんな高級な宝石よりも輝いて見えた。

僕たちの関係は、きっとこれからも続いていく。

貧乏で、強がりでも、でも最高に愛らしい彼女との、甘くて騒がしい日々が。

僕は彼女の手を握り返し、駅へと続く坂道を歩き出した。

繋いだ掌の温もりだけが、永遠に消えない約束のように感じられた。

